

(執筆者の許諾を得て掲載しております)

2022年8月4日 朝日新聞記事

「(つながる空の下 第19部：上) 障害の有無を超え、競い合い」(抜粋)

記者 塩谷耕吾

■ 東京パラリンピックから1年

宮城県石巻市で7月17日にあったライフル射撃の全日本選手権。車いすの後藤良一さん(65)はひじを台についた姿勢で、10メートル先の標的をビーム銃で撃った。これまで健常者だけの大会だったが、初めて障害のある選手が正式に参加した。

後藤さんは頸椎(けいつい)損傷の影響で下肢障害がある。車いすで22年間競技を続け、障害者の全日本大会にも出場した。「チャンスが増えるのはいいこと」。主催する日本ライフル射撃協会によると、来年3月の全日本選手権には障害のある選手がより多く参加予定という。

協会が新たな試みを始めたのは、松丸喜一郎会長が東京パラリンピックで目にした光景がきっかけだ。

射撃競技は立ったり伏せたりと決められた姿勢で競う。パラは違った。同じ下肢障害でも、車いすに座って撃つ選手がいれば、いすに腰掛けて中腰で撃つ選手、義足で立って撃つ選手……。障害の程度に応じた姿勢で競い合っていた。

松丸会長は「『スポーツは自分を超越するために戦う』という(近代五輪創始者の)クーベルタン男爵の言葉を思い出した」。パラ射撃は障害の程度を超えて競い合えることを証明していた。ならば、スポーツには障害の有無さえ乗り越える力があるのではないか。その気が「共生大会」につながったという。

松丸会長は東京五輪・パラを経て、「競技団体は各競技がどんな価値を社会に発信できるかが問われるようになった」と話す。